

# 『分別縁起初勝法門經 (AVVS)』

— 経量部世親の縁起説 —

松 田 和 信

## 一 問題の所在

### 二 世親の『縁起経釈 (PSTV)』

### 三 『阿毘達磨集論 (AS)』の縁起説

### 四 まとめ

#### 〔資料篇〕

- (1) AVVS の「十二支縁起説」和訳
- (2) AVVS チャンェツ語訳の回収
- (3) YBIVy に於ける AVVS の引用例

玄奘訳『分別縁起初勝法門經』(大正卷十六、八三七—八四四)、および、この異訳である達磨笈多訳『縁生初勝分法本經』(大正卷十六、八三〇—八三七)は漢訳としてのみ現存し、『成唯識論』に五箇所言及される以外に、インド佛教史上に登場した形跡は、現時点では報告されて

いない。しかし、この經典が、「縁起の解釈についても新たな展開を示し、唯識思想史からも注目すべき」ものであることはすでに指摘されており、本稿でも考察するよう、インド佛教において重要な經典の一つであったことが知られる。本稿では、従来その性格の十分に明ら

かにされていなかったこの經典について、チベット語訳に伝わる世親造『緣起經釈 (PSV)』における引用あるいは言及に基づいて、そのインド佛教史上におけるより確かな位置付けを試みるとともに、そこで述べられる十二支緣起解釈について、世親の思想的変遷『俱舍論』において経量部へ傾斜した後、『成業論』においてその立場を鮮明にし、さらに瑜伽行派へと推移していったと思われる)の上で若干の考察を加える。なお「資料篇」として、この經典の中心部分の玄奘訳よりの和訳、およびこの經典の *PSV*、*YBhV* における引用例の抜き書きを両漢訳相当部分とともに掲げ、漢訳としてのみ現存するこの經典の原典形態を考察する一助としたい。

## 一 問題の所在

『成業論 (KS)』において、世親は「思によって心相統が熏習せられて、そこに功能の差別が生じ、その功能・種子の転変する差別から当果を生起する<sup>③</sup>」という経量部説に立場を置き、業果の問題を説明しているが、その細部については経量部内部でも種々に見解が分かれ、世親はその種々の説を、減尽定有心無心説にかんする議論を通して、世親自身の所屬する経量部の一派の考え方へ

と導いている。つまり世親は、減尽定においても滅することなく、涅槃に至るまで連続してゆく異熟識 (*vipaka-saṃhāra*) Ⅱアーラヤ識の存在を認め、その異熟識の中に、当果を生じるための種子 (*bīja*) が保持されると考えるのである。この点について世親は次のように説明する<sup>④</sup>。

〔問〕では(減尽定においても)心を有することをどのようにして認めうるのか。〔答〕ある経量部の人の認めていることと同様である。〔問〕ある経量部の人はどのように認めるのか。〔答〕一切の種子のある異熟識 (*vipaka-vijñānam sarva-bhāgam*) は結生 (*pratisandhi*) より始めて、それぞれの生 (*janman*) において間断なく (*nirantaram*)、種々なる異熟因によって種々なるものとなり、涅槃に至るまで連続し続けるものである(ので、その人は) その(減尽定の) 時に死なないのである。それ故、その状態は「心を有する」と言われるのである。……以下省略。

右の引用中の「ある経量部の人、云々」という一句に對して、スマティンシーラは次のように極めて注目すべき注釈を施している<sup>⑤</sup>。

『ある経量部の人の認めていることと同様である。』とは、(ある経量部の人が認めている如く) 同様に

(滅尽定においても)心を有すると認める、と文章

を補う。そしてこの(文章)によって、アーチャー  
ルヤ(「世親」の考えておられる主張が示されたの  
である。『ある(経量部の人)』とは、『分別(縁起)  
初勝法門(経)』を考察する人々という意味である。

ここでスマティシーラは、「ある経量部の人」の考  
え方が世親自身の主張に外ならないことを示した後で、そ  
の経量部が所依としている『分別縁起初勝法門経』とい  
う一經典を掲げているものと思われる。ではこのスマテ  
ィシーラの注釈(KST)のチベット語訳において *Dai pohi  
khyad par nam par hbyed pai chos kyi nam gravis  
と訳され、\*Adi-viśeṣa-vibhāga-dharma-pariāya と*  
還元しうる經典は、いかなる内容を持ち、その経名の意  
味は何かという点について、その漢訳に基づき少し述べ  
ておく。まずこの經典の内容についてであるが、縁起の  
十二支分の中で、何故「無明」が最初に説かれるのかと  
いう比丘の質問に対して、世尊が「無明」つまり「初め  
のもの(ada)」には十一項目よりなる「殊勝点(viśeṣa)」  
があることを提示し、それぞれの殊勝点を順次「分別  
(vibhāga)」してゆくという形で本経は構成されてくる。  
従って、十二支「縁起」の中の「初めのもの(無明)」の

殊勝点「初勝(adi-viśeṣa)」を「分別(vibhāga)」すると  
いうことがこの経名(玄奘訳)の意味であり、達磨笈多訳  
の経名もこれに準ずると考えられるのである<sup>⑦</sup>。かつて山  
口益博士もこの KST の一語が、世親の所属する経量部  
のある一派の名称を示すものであるとして、重大な関心  
を示されたが、博士はこの奇妙な語がこの經典を意味す  
るものであるとは読み込んでおられないために、この語  
の重要性を指摘するに止まられたのである<sup>⑧</sup>。

ではここでスマティシーラは何の脈絡もなくこのよう  
な経名を持ち出したのであろうか。そうではない。十分  
な理由があるのである。本稿第二節で述べるが、世親に  
は『縁起経積(PST)』という著作があり(チベット語訳  
のみ現存)、その中でこの經典は重要な位置を占めている  
のである。さらにこの經典に説かれる縁起説は、これも  
後で述べるが、種子説と異熟識説とによって理論づけさ  
れており、KS のこの一節と大きくかわり合うのであ  
る。PST におけるこの經典の引用あるいは言及からは、  
この經典の経名は、還元した形で提示すると、\*Adi-  
viśeṣa-vibhāga-sūtra と \*Adi-viśeṣa-vibhāga-dharma-  
pariāya と、あるいは単に \*Adi-viśeṣa-vibhāga と  
題されているが、本稿では \*Adi-viśeṣa-vibhāga-sūtra

(AVVS)とらう名称を便宜上用いる。

以上の如く KST のただ一つの語句を通して、我々の視野には AVVS なる一経典が現われるに至ったのであるが、ではこの AVVS は世親の思想的変遷の上で、いかなる役割を果たしたのであろうか。次にそのことを解明するために、我々は、世親自身の著作に言及される AVVS の引用例を見てゆかねばならない。

## 二 世親の『縁起経釈 (PSVy)』

『成唯識論述記』の記述によると、世親には『縁起論』<sup>⑩</sup>あるいは『十二因縁論』なる著作のあることが知られるが、実際、チベット大蔵経の中には、世親の『縁起経釈 (PSVy)』なる論書が徳慧の複注 (PSVya) と共に収められている。<sup>⑪</sup>これはチベット語訳の分量でいうと、『撰大乘論世親釈』に匹敵する程のかなり大部なものであり、その約十分の一程度の梵文断片が公表されている。<sup>⑫</sup>

この PSVy によって注釈される『縁起経』とは、漢訳『雜阿含経』第二九八経(大正卷二、八五 a b)、およびこれの単訳經典である玄奘訳『縁起経』一卷(大正卷二、五四七 b—八 a)に相当するものであり、梵文原典も『雜阿含』所収のものについては中央アジアで、単訳のもの

はインドで発見され校訂出版されている。<sup>⑬</sup>これにはチベット語訳もあり、それによると原題は \*Pratītyasamutpādādi-vibhāga-mirdesa-sūtra (PSAVNS) であるが、この場合の *adi* と *vibhāga* の意味は AVVS の経名とは異なり、*adi* とは十二支縁起の総論 (*uḍḍeśā*) を指し、*vibhāga* とはそれぞれの各論 (*nirūḍḍeśā*) を指す。<sup>⑭</sup>従ってこの経名の意味は『縁起の総論と各論とを説く経典』とらうことであろう。PSVy の論名はチベット語訳によると \*Pratītyasamutpādādi-vibhāga-mirdesa であるが、本稿では梵文断片に見い出される論名 *Pratītyasamutpāda-vy-āhāya* (PSVy) に従うことにした。

さて、PSVy において、世親は PSAVNS をこのように解釈しているかという点であるが、その最も注意すべき箇所は第三「識支」の解釈である。つまり PSAVNS における『行を縁として識あり』という場合の識とは何か。六識身である。<sup>⑮</sup>という経文に対する世親の解釈は、その中の「六識身」という語が、実はアーラヤ識 || 異熟識を密意 (*abhiprāya*) するものであるとして、そのアーラヤ識の存在論証にその大部分があてられているのである。そして驚くべきことに、その論証は KS における異熟識説導入の所述と共通するだけでなく、その部分

のKSの所述のほとんどがPSVy中に準レベルな形で  
見い出されるのである。そしてPSVyの説明はKSの  
所述を含んで、さらに詳細である。このPSVyのアーラ  
ヤ識説については、別な機会に詳細を発表したいが、こ  
のアーラヤ識説は瑜伽行派の諸文献に現われるアーラヤ  
識説とは異なり、KSの異熟識説と同様、八識説は述べ  
られず、経量部的色彩を帯びたものである。

さて本稿で問題にしているAVVSはこの識支の解釈  
の中、アーラヤ識の存在論証の末尾に次のように言及さ  
れる。<sup>19)</sup>

『分別（縁起）初勝法門（経）』の中にも、『行を縁  
として識あり。』という場合のこの（識）がこれ（ア  
ーラヤ識＝異熟識）に外ならないと説かれている。

『瑜伽師地（論）』と『解深密（経）』の中にも、そ  
れぞれの句で説かれている。大徳化地部のアビダル  
マの法門の中にもこれと同じものが説かれている。  
以上のように、理証と経典および論書とを通してア  
ーラヤ識（の存在）が証明された。

この中で世親はPSVYと並列的に『瑜伽師地論』と  
『解深密経』の名称を出しているが、このことはPSVy  
が大乗の立場に立つものであることを意味するものでは

ない。これはKSにおける『解深密経』の引用に対して、  
山口博士が「世親は解深密経を、彼の論題の解明の為に  
もち出しているのであって聖教量として用いているので  
はない。」とするラモート博士の説を考慮するのと軌を  
一にしているのであって、PSVyの立場は、KSと全く  
同じであることがこのPSVyの「識支」の解釈を通して  
知られるのである。一方、PSVyにおいて重要な位置を  
占めるのは右の引用中最初に言及されたAVVSである  
と考えられるが、PSVyにおいて、AVVSはこの部分以  
外に五箇所で引用され（本稿末尾の資料篇[2]参照）、そのほ  
かなお一箇所で言及される（次に述べる）が、それによっ  
て知りえるのは、世親は、PSVyにおいてPSAVVSを  
注釈しながらも、その十二支縁起解釈は次に引用するよ  
うにまったくAVVSに基づいたのである。<sup>20)</sup>

さてそのAVVSを援用しての世親の十二支縁起解釈  
は、PSVyにおいて、次のように提示される（なおこの部  
分は説一切有部の十二支縁起解釈に対する反論の形で述べられ  
る。<sup>21)</sup>

この十二支（縁起）の説明によって、要約すれば、  
何が説かれるのか。『分別（縁起）初勝法門（経）』  
に基づいて理解される如くのことが必要して説かれ

るべきである。

つまり、(1)何によって、(2)どのように、(3)何が引かれ、またその引かれたものは、(4)何によって、(5)どのように生じ、(6)その生じること何であり、(7)その時の苦惱は何かというそれらのことが(十二支縁起説によって)説かれるのである。

(1)何によって引かれるのか。「無明」を縁とする「行」によってである。(2)どのように引かれるのか。識の中に習気が熏習されることからである。(3)何が引かれるのか。後有の「名色・六処・触・受」とがであって、それらは、所応のままに、順次に、また同時に、生ぜしめられるからである。その引かれたものは何か。識の中で成長するそれ(名色・受)の子、それがその引かれたものである。(4)(その引かれたものは)何によって生ぜしめられるのか。上述の如くの順序に従って、先に引かれたもの(名色・受の種子)によって、そこに生じた「受」を縁とする「愛」、その(愛)を縁とする「取」によってである。(5)その(愛を縁とする取)によってどのように生じるのか。識の中に習気として安住する(その)業をそれ(愛を縁とする取)によって「有」となす

ことからである。なぜなら、種々なる行によって熏習されているが故に、識の中には多種の業の習気があるのであり、取の特殊性によって保持されている(が故に)、それによって、それより、第二に後有を生ぜしめるところのもの、それがここでは「有」と言われる。(6)その生じること何か。その引かれたものである名色等の、未来における「生」である。(7)その(生じることが)ある時の苦惱は何か。「老死」である。なぜなら愛しい若さと命が壊れるが故に。

「無明」を縁とする「行」によって引かれ、「愛」を縁とする「取」によって生じることとは、どのようにして明瞭になるのか。なんとならば、(四)諦を見る時には、後有を引くことはないのである。聖なる諦に対する明知(ārahant)が生じるからである。また離貪した阿羅漢には先に引かれたものはあるけれども後有は生じないのである。

以上の意味を包括するための五偈。<sup>②</sup>  
「第一偈」何によって、どのように、何が引かれ、その「引かれたものを」生ぜしめ、その時の苦惱は何か。それらのことが十二の支分をもって説かれる。

〔第二偈〕(1)二(無明・行)によって、(2)一支(識)によって、(3)四種(名色・受)によって、(4)二(愛・取)によって、(5)一(有)によって、(6)一(生)によって、(7)一(老死)によって、七つの意味を説いたのである。

〔第三偈〕(1)(四)諦を如実に知らないが故に、業によって、(2)心に熏習されるが故に、(3)四支が順次に引かれ、その種子が成長するが故に、

〔第四偈〕(4)受によって生じた愛より取が生じることによって、引かれた如くに生じ、(5)その熏習された業が現前し、

〔第五偈〕(6)生ぜしめられるのは「生」であり、(7)その時の老死は苦悩である。なんとならば、(四)諦を見れば、引かれることなく、愛を離れば、(後有が)生じることなし。

右の引用中、傍線で示した部分は、『中辺分別論』安慧の所述と完全に一致する箇所である。これは『中辺分別論』第一章第十一偈後半中の「七種の雑染」に対する第二の解釈にあたる部分で、「また七種の因の説明によって、引くこと(aksepa)と生じること(abhinivṛtti)とを相とする二種の縁起が説かれたのである云々。」と

いう語で始まるが、これは、安慧が *PSV* を知っていたことの一つの証拠であり、安慧はこの *PSV* の文章をそのまま自分の注釈中に取り込んでいるのである。

以上のように、世親は、縁起の十二支分を「七つの意味」に区分し、識中に熏習された後有の種子が当果を生じる様態を説明している。つまり、無明から受に至る七支を通して、後有である名色・六処・触・受の種子が識の中に熏習されることを説き(以上は七つの意味中、第一・三の項)、愛から生に至る四支を通して、その名色等の後有が現成することを説き(以上、第四・六の項)、その結果として苦悩があることを老死の支分によって説く(第七項)。そしてこの世親の十二支縁起解釈は、右の引用の最初に示されるように、*AVS* の縁起説に基づいているのである。その *AVS* の内容は、第一節で示したように無明の十一種の殊勝点を説くことにあるが、その中で、第四「等起殊勝」が *AVS* の中核を形成し、そこでこの經典独自の十二支縁起説が展開される。この縁起説は「能引所引」および「能生所生」の二種の縁起に分けられ、前者によって種子を熏習することが、後者によってその種子より後有を現成することが説かれる。その具体的内容については、本稿末尾の資料篇[1]に譲るが、

この二種の縁起説を、世親は *PSVya* おこて七項目に区分して取り上げ、自らの十二支縁起解釈の根拠としているのである。従って、右の引用は世親による *AVVS* の縁起説の要約とでも言えるのである。

### III 『阿毘達磨集論 (AS)』の縁起説

以上、*AVVS* の十二支縁起解釈、およびそれを「七つの意味」に分割して整理する *PSVya* での世親の解釈を述べてきたが、この縁起説は有部所伝のいわゆる「三世兩重の因果」とは明らかに異なり、『成唯識論』第八卷に代表される「二世一重の因果」と非常に近い関係にあるように思われる。この「二世一重説」が明言されるのは、恐らくは、『阿毘達磨集論 (AS)』およびそれに対する注釈 (*ASBh*) が最初であると思われる。AS では、十二支縁起の支分の要約として、十二支を能引・所引・能生・所生の四つに分類するが、この分類は前述の *AVVS* の分類と同じであり、『成唯識論』もその一部を変更して受けついでいる。AS ではその分類が示されるだけでなく、それに対する *ASBh* の解釈は *PSVya* の解釈と多くの共通点を持つものである。その部分を和訳すれば以下の如くである。<sup>③</sup>

無明等に分割される十二の支分をさらにまとめれば、能引の支分等の四支分となる。そしてこれだけが流転(分)の説明として示される。つまり、因の時に(1)何によって引かれ「能引」、(2)何が引かれ「所引」、果の時に、(3)何によって生じ「能生」、(4)何が生じるのか「所生」というこれら(四)支分によって、そのすべてが説明されると理解すべきである。その中、(1)「能引の支分は無明と行と識とである。』未来の生を生ぜんがために、(四)諦に対する無知に先行される業によって心が熏習されるが故に。<sup>③</sup>(2)『所引の支分は名色と六処と触と受とである。』その心が熏習されることによって、名色等が未来に前後に所依となる順序で生ずるために、(名色等の)種子が成長するが故に。

(3)『能生の支分は愛と取と有とである。』欲(界)等の愛 (*tṛṣṇā*) をいまだ断じていないことによって、欲(界)等において、妙行と悪行というあり方に対する愛楽 (*rati*) に先行される欲貪 (*chanda-rāga*) によって、取を有する識がある時に (*sopādāne vijñāne*)、命終の状態において、果を与えんがために、<sup>③</sup>欲貪に随順するいずれかの業の習気が現前するが故



に。

(4) 『所生の支分は生と老死とである。』 そのようなあり方によって、異った業の習気が現前する時、

(六) 趣 (四) 生等の区分に分けられたいずれかの衆同分中に、引かれたままに名色等が生じることが故に。

この AS および ASB の十二支縁起解釈は AVVS と同様に、十二支分を能引等の四項目に分割した上で、「能引所引 (無明・受)」によって後有の存在である名色等の種子が識に熏習されること、つまり「因」のあり方を説明し、「能生所生 (愛・老死)」によってその種子より後有が現成すること、つまり「果」のあり方を説明する。そしてこのような縁起説を世親は PSV において、さらに七項目に分割して説明しているのである。従ってこの縁起説は、今述べたように有部の三世にわたる十二支解積とは異り、ある一つの生存において作した業(行)が心相續に種子として熏習され、それが次の生存において果として生じるといふ、本稿の最初に述べた KS の異熟識説と共通の内容を持つことになるのである。

従って AVVS の縁起説は瑜伽行派の文献に現われる縁起説と共通のものであると思われるのであるが、一方において S44F S44F では「四諦十六行相」によって無明の

対治を説明し、<sup>⑤</sup> また *Mahā-midāna-paryāya*, *Sahetu-*

*saprabhaya-samādāna-sūtra* といった先行する阿含経典を引くなど、説一切有部の影響も色濃く残されている。

また前提となっていることは、この経典は大乗のものではなく、あくまで経量部のもの、つまり小乗経典として分類されるものである(資料篇<sup>3</sup>)も参照せよ。そしてこの AVVS が、スマティシーラの述べるように、異熟識説を立てた経量部の一派、つまりその時点での世親の所依の経典であるというなら、このことは、山口博士の『成業論』研究の結論ともいえる「成業論は、世親が大乗教としての瑜伽唯識説を知り、それによって影響もせられながら、まだ大乗教への転回の間をもっていなかった思想的な位置に位したときのもの」という世親の立場が AVVS 自身にそのまま反映されているとも言いうるのではなからうか。そしてこの立場は AVVS を援用しつつ PS4VNS を解釈した PSV の思想的立場でもあるのである。

#### 四 ま と め

KS の異熟識説に対する KSJ のただ一つの語句を出発点として、AVVS およびそれを援用して十二支縁起説

を解釈する *PSVy* の所説を紹介した。そして本稿での考察を通して知り得たことは、従来全く等閑に附されてきた *ĀVVS* が、大乘へ推移する直前にあった世親の属する経量部の一派の所依の経典であるということであり、それを援用する *PSVy* も同様の立場の著作であるということである。

本稿では *ĀVVS* および *PSVy* の一部を紹介するとどめたが、世親の思想的変遷を考察する上でこの両者は今後とも詳細に研究されるべきものである。従って本稿が今後の研究に対して序論となれば幸いである。

略号

- (*ĀVVS*) \**Ādi-viśeṣa-vibhāga-sūtra*
- (*AS*) *Abhidharma-samuccaya*
- (*ASBh*) *Abhidharma-samuccaya-bhāṣya*
- (*KS*) \**Karma-siddhi*
- (*KST*) \**Karma-siddhi-tīkā*
- (*PSĀVNS*) \**Pratītyasamutpādādi-vibhāga-nirdeśa-sūtra*
- (*PSVy*) *Pratītyasamutpāda-vyākhyā*
- (\*)*Pratītyasamutpādādi-vibhāga-nirdeśa*
- (*PSVyT*) \**Pratītyasamutpādā-vyākhyā-tīkā*

(\*)*Pratītyasamutpādādi-vibhāga-nirdeśa-tzū*

(*YBhVy*) \**Yogācāra-bhūmi-vyākhyā*

註

- ① 経名は出さないが、『述記』において『縁起経』の経文とされる。これが『分別縁起初勝法門経』を指すことは、勝又俊教『佛教における心識説の研究』(山喜房・昭36)七九～八一頁に詳しい。
- ② 桑山正道・袴谷憲昭『玄奘』(大蔵出版・一九八二)二七三頁。
- ③ 山口益『世親の成業論』(法蔵館・昭29)二二、四二、一五九頁、および同「成業論の原典に対する一疑問」(『佛教学セミナー』20号)一四二～三頁。
- ④ テキストは山口前掲書末尾二〇～二頁。博士の和訳は同書一九〇～二頁参照。
- ⑤ *KST*, P. ed., No. 5572, I, 100a<sup>5-7</sup>, 山口博士の和訳は前掲書一九二頁参照。
- ⑥ 各資料間の *vibhāga* と *vibhāga* の混用は、本稿では *vibhāga* に統一した。
- ⑦ 玄奘訳の「縁起」「笈多訳の「縁生」という語はいずれも *pratītyasamutpāda* の訳に相違ないが、チベット語訳資料〔資料篇23参照〕における引用例がすべてこの語を欠くことからして、この語は漢訳者の付加であると考えられる。
- ⑧ この語は、佐藤密雄『大乘成業論―佛典講座41』(大蔵

出版、昭53)二〇七頁にも山口博士の和訳のままの形で用いられている。なおこの語は KST 中であと一箇所言及される(山口前掲書一九八頁参照)。

⑨ 山口前掲書一九四頁、註(3)参照。博士は *dan po* を *adi* ではなく *prahama* と還元しておられるが、この語が「無明」を意味すること、および AVVS と PSĀVNS の経名の不思議な一致(本稿第二節参照)という点に筆者は関心を引かれる。現存文献中に「無明」を *adi* と言ひ替えた用例を確認できなかったのが残念である。なお拙稿「Yogācārabhūmi-vyākhyā」におけるブーラヤ識とマナスの教註について」(『印佛研』三〇巻二号、一六〇—一頁)参照。

⑩ 資料篇2参照。

⑪ 『述記』(佛光大系本)第一巻一三八頁、第四巻二二二頁参照。

⑫ PŠTy, P. ed., No. 5496, Chi. 1-71a<sup>s</sup>, D. ed., 3995, Chi. 1b-61a<sup>r</sup>, PŠTyT, P. ed., No. 5497, Chi. 71a<sup>s</sup>-283b<sup>e</sup>, キンネットの伝承では PŠTy は世親の八論書の二つに数えられる(袴谷豊昭「瑜伽行派の文献」講座大乘佛教(一)唯識思想—六九頁)。

⑬ G. Tucci, "A Fragment from the Pratiṣasannutpādayākhyā of Vasubandhu," *The Journal of the Royal Asiatic Society* (1930) pp. 611-623, 以下本稿で引用した部分はこの断片中には含まれなご。

⑭ 『雜阿含經』所収分については C. Tripāṭhī, *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, (Berlin, 1962) pp. 157-64, 又疑訳『緣起經』について N. A. Sastri, *Ārya-*

*Sūtilambasūtra*, (Madras, 1950) の第二部 (pp. 21-24) に N. P. Chakravarti の出版 (*Epigraphia India*, XX, No. 32, 筆者未見) に基づいて掲載。なお *Buddhist Sanskrit Texts*, No. 17, pp. 117-119 にも同様に掲載。両経が同本であることは、漢訳を見る限り判然としないが、両梵文テキストを比較すると明瞭である。ただし前者は『雜阿含經』に組み込まれている関係上、序分等は省略されている。袴谷氏の指摘にさらたこのことを補足すべきである(前掲『支那』二六—一七頁)。

⑮ P. ed., No. 877, Mu. 131a-132b<sup>a</sup>, J. W. de Jong のチヤマド語訳テキストを出版している。"A propos du Nidānasamyukta," *Buddhist Studies*, (Berkeley, 1979) pp. 246-249.

⑯ PŠTy 3b<sup>i</sup>, (以下本稿では P. ed. の頁数のみを示す。) 高田仁寛「緣起の初分に関する世親と徳慧の解釈」(『印佛研』七巻一号六九頁)参照。高田博士のこの論文中で紹介される(七五頁)「瑜伽師地論者」なる表現 (PŠTy 5b<sup>2</sup>, \**Nalābyor śyod pañc sa pa dag*, \**Yogācārahūmika*) は、向井亮氏の瑜伽行派の学派名の考察(『三藏』一五三卷)における根拠を与えるかと思われる。なお高田博士には PŠTy の無明の解釈を紹介する論文もある(『印佛研』八巻一号所収)。高田博士のこの二つの論文、およびフラワルナー博士の部分訳 (*Die Philosophie des Buddhismus*, Berlin, 1956, pp. 43-49) 以外に PŠTy に対する研究を筆者は知らなご。

⑰ Tripāṭhī ed., p. 159, Sastri ed., p. 22.

⑱ その概略については『印佛研』31巻に発表の予定。

- ⑲ *PSVy* 25b<sup>4-6</sup>.
- ⑳ *PSVy* F にある (156b<sup>4-6</sup>) 「経典」とは「滅尽定に入つた人々は身行滅せず云々。」と云う経典であり、「論書」とは「大徳化地部の法門」を指す。
- ㉑ これ以外に「無明」の解釈におおつて長文が引用される (*PSVy* 11b<sup>2</sup>-12a<sup>1</sup>). Bhattacharya ed, p. 204, l. 1 ~ p. 205, l. 12, 大正卷三〇、三二二b<sup>1</sup>に相当する部分。ただし最初の一文を引用した後、残りを省略して紹介している。
- ㉒ 山口前掲書二〇及び三十三頁。
- ㉓ ㄱ에 *Pratyasamutpāda-vibhāga-sūtra* を *Ati-viśeṣa-vibhāga-sūtra* と解釈すること、<sup>2</sup> じやとさ語四合わせのようなことになるのであるが、両経の経名の不思議な関係は何らかの意味があるのであろうか。
- ㉔ *PSVy* 60a<sup>2</sup>-b<sup>8</sup>.
- ㉕ この部分に対する *PSVy* F は (255a<sup>1-2</sup>) 「成長する後有の名色と六処と触と受との種子と云う意味であつて、それはまた、ブーヤ識中で行によつて成長するその種子である」と理解すべきである」と述べる。この縁起説では名色から受のみが、成長するまでの人間存在の各段階を意味する。資料篇 2 の引用例 (1) (チャット語訳部分) を参照。
- ㉖ 「第二に」と云う語が何を意味するか理解できなげ。後述の『中辺分別論』安慧釈にはこの語は現われなげ。この語を含めてこの第五の項は難解である。資料篇 1 の *JVS* の対応箇所を参照のこと。
- ㉗ 以下の五偈は引用ではなく世親の自作偈であらう。  
*PSVy* F にある (255b<sup>8</sup> 以下) 第一偈で総論し第二偈以下

で各論すること述べる。内容的にはまさに上述の七項目を要約している。

- ㉘ S. Yamaguchi ed, *Madhyāntavibhāgaśāstra*, (Nagoya, 1934) p. 43, l. 12~44, l. 5, G. Tucci ed, *Madhyāntavibhāgaśāstravibhāgaśāstravibhāgaśāstra*, (Calcutta, 1932) p. 36, l. 14~37, l. 6, 山口博士の和訳『中辺分別論釈』六三~四頁参照。次に梵文を示しなげ。題元された部分は山口本に従ふ。  
saptadhā-hetu-nirdesena punar dvi-viḍhaḥ prativyasa=mutpādaḥ pradarśitah | akṣepa-lakṣaṇo 'bhiniṛytil-lakṣaṇas cēti | tatrākṣepa-lakṣaṇaḥ prativyasanmutpā=daṣya saptabhir aṅgar nirdiśtah | (1) yenaḥkṣipyate (2) yathākṣipyate (3) yac cākṣipyate tat-pradarśanāt | abhiniṛytil-lakṣaṇaḥ pamaḥbhir aṅgaḥ | tasyākṣip-tasya (4) yenaḥbhiniṛytil (5) yathābhiniṛytil | (6) yā cābhiniṛytil (7) tasyāṃ ca ya ādnava iti | (1) kenākṣipyate avidyā-pratyayaḥ saṃskāraḥ | yathā tatte mugdhvā viparitam saṃjānāti kuśālukṣaṇā=riyāṃ saṃskāraṃ abhisamkāroti | (2) katham akṣip-yate tair saṃskāraḥ viññāne bīja-poṣanād utpatti-bhavyatāyāṃ avasthānāt | (3) kim akṣipyate punar-bhaviḥkaṃ nāma-rūpaṃ sad-āyatanaṃ spaśo vedāna ca yathā-yogam | (4) tad evam akṣiptaṃ kenābhini-ratyate yathōkta-krameṇa pūrvaḥkṣipād ihōṭpannāṃ vedanāṃ pratitya yā tīrṣṭōpannā tat-pratyayenōpā=danena | (5) katham tenābhiniṛatyate tasya viññāne vasaṅvāsthasya karmaṇas tena bhavīkaraṇāt | bah-

vidhā hi vijñāne karma-vāsanā vartate | vicitra-saṃ-

skāra-paribhāvitatvāt | upādāna-viśeṣena parigrihitād

yenātra punar-bhavatvaṃ vartate so 'tra bhava ucyate

— (6) kā punaḥ sābhimirvitiḥ | yā tasyākṣiptasya  
nama-rūpādikasvāyatyaṃ jātiḥ | (7) tasyaṃ punaḥ  
satyaṃ ka ādinavaḥ jarā-maranaṃ priya-yaavana-  
jivita-bhraṃśād iti |

② G. M. Nagao ed., *Mahyāntarabhāga-bhāṣya* (Tokyo,  
1964) p. 21, l. 21.

③ 忠実な祖述家であった安慧がしばしば自分の著作中に他人の文章を取り込んでゐることはすでに幾例か指摘されてゐる。小谷信千代「瑜伽師地論と大乘莊嚴經論」(『佛教学セツナー』三三三頁)、袴谷憲昭「*Viniścayasamgrahani*」におけるブーラーヤ識の規定」(『東洋文化研究所紀要』七九冊)七～九頁参照。さらに、安慧はこの *PSVy* の識支における次の一文も、「識」という語を「ブーラーヤ識」と変えて、『唯識三十論』の注釈中にそのおまけ用として (Lévi ed., p. 38, l. 11~13) 。 ma rig paṃi rkyen gyis hdu byed yin la | des bsgos paḥi nram paḥi nram par śes pa ni hdu byed kyi rkyen gyis yin no | deḥi rkyen gyis kīn mtshas sbyor baḥi tshe min dan gzungs yin no shes bya ba de lta buḥi lugs hdi ni skyon med pa yin no | (*PSVy* 23a<sup>3-4</sup>)

④ V. V. Gokhale, "Fragments from the Abhidharmasa-

muccaya of Asaṅga," *The Journal of the Bombay Branch, Royal Asiatic Society*, N. S., vol. 23, p. 26, l. 6-9.

⑤ N. Tatia ed., *Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam*, (Patna, 1976) p. 31, l. 9-21, 『阿毘達磨雜集論』大正卷三十一、七一a~c。

⑥ Tib. (P. ed., No. 5554, Si, 29a<sup>6</sup>) ni 「……業の習気が心に熏習されるが故に。」と訳す。

⑦ 原文 antara を Tib. གཏཱིའེཔ་ anyatarara に訂正。

⑧ 「異った (anya)」が何を意味するか理解できない。

⑨ 玄奘訳八四二。以下、達磨笈多訳八三五b以下。

⑩ 玄奘訳八四〇。八四一bに引用され、『有因有縁有由法門經』『大因縁法門經』と訳される。この二つの經典は『俱舍論』および *PSVy* への引用される。

⑪ 山口前掲論文一四五頁、同前掲書三四頁参照。

⑫ 「付記」本稿において、筆者は *AVTS* が瑜伽行派のアーヤ識説の先駆をなすものであると言っているのではない。有部→經量部→瑜伽行派という道筋は、世親という個人においてのみ言えることであって、それと瑜伽行派の思想形成とは全く事情が異なる。本稿の最後に山口博士の言葉をかりて述べた如く、筆者には、*AVTS* がすでに確立されていた瑜伽行派の思想の影響を受け、經量部説に立つ世親に非常に近い位置で作成された經典であるように思える。以上、誤解のないように一言つけ加えておく。(初校の日)

〔資料篇〕

以下に本稿での論述を補足するために三部よりなる資料篇を掲げる。作成にあたっては、漢訳資料の取り扱いについて、大谷大学大学院・加治洋一氏の全面的協力を得た。特に資料篇〔1〕の現代語訳は、全く同氏の研究成果に負うものであることを記しておきたい。

〔1〕 AVVS の「十二支縁起説」和訳

本稿第二節で、PSV<sub>1</sub>の十二支縁起解釈がAVVSの縁起説に基づくものであることに注意し、それを七項目に分割するPSV<sub>1</sub>の解釈について述べたが、ここでそのPSV<sub>1</sub>の解釈と対応するAVVSの所述を、玄奘訳に基づき、笈多訳を参照しつつ和訳しておく。この部分は第一節で述べたようにAVVSの所述の主題である無明の十一種の殊勝点のうち、「等起殊勝」の前半に相当する。和訳にあたっては、その所述をPSV<sub>1</sub>の解釈に従って七項目に分割し、玄奘訳を上段に付す（大正卷十六、八三八a—c）。

## ※ 十二支縁起の概説

復言。世尊。云何無明等起殊勝。世

尊告曰。謂此無明、或愚当来苦諦所撰後有自体、或愚現法苦諦所撰已得自体。如是愚者、或有能引所引縁起、有能生所生縁起。此二縁起即以愚於於当来現法自体、無明作等起縁。

また（比丘が）尋ねる。世尊<sup>①</sup>、無明の等起殊勝とは何ですか。

世尊がお答えになる。来世の苦諦に撰められる次に取る生存について人を愚昧にさせるのがこの無明であり、或は現在の苦諦に撰められる今得ている生存について愚昧にさせているのもこの無明である。この愚かさによって能引所引の縁起があり、能生所生の縁起がある。この二種の縁起がつまり来世と現世の二つの生存について愚昧にさせるのであり、それは皆、無明が等起の縁となっているのだ。

### (A) 「能引所引の縁起」(総論)

復言。世尊。云何能引所引縁起。世

尊告曰。第一、無明縁行、行縁識、識縁名色、名色縁六処、六処縁触、触縁受<sup>②</sup>。是名能引所引縁起。

また（比丘が）尋ねる。世尊、その能引所引の縁起とは何ですか。

世尊がお答えになる。先ず、無明を縁として行があり、行を縁として識があり、識を縁として名色があり、名色を縁として六処があり、六処を縁として触があり、触を縁として受がある。これが能引所引の縁起である。

### (B) 「能生所生の縁起」(総論)

復言。世尊。云何能生所生縁起。世

尊告曰。第二、無明縁受、受縁愛、

また（比丘が）尋ねる。世尊、では能生所生の縁起とは何ですか。

世尊がお答えになる。第二には、無明を縁として受があり、受を縁として

愛縁取、取縁有、有縁生、生縁老死。  
是名能生所生縁起。

愛があり、愛を縁として取があり、取を縁として有があり、有を縁として生があり、生を縁として老死がある。これが能生所生の縁起である。

(A) 「能引所引の縁起」(各論)

(1) 何によって引かれるのか。「無明・行」

復言。世尊。云何名為第一無明与其能引所引縁起作等起縁。世尊告曰。

そこで(比丘が)尋ねる。世尊、どうして先ず無明が能引所引の縁起にとつて等起の縁となるのですか。

謂有一類、愚於当来後有自体即便發起後有希求。由愚所生後有希求便於後有見勝功德。若於現法執著可愛不可愛境、邪分別故造非福行。彼於資具生貪著故。或於怨憎生瞋恚故。及彼相応不能決了功德過患。放逸愚故造斯惡行。即於後世所有過失不能思惟、不能解了行相。無明能作如是非福行縁。若於後有見勝功德、或見出離便造福行或不動行。彼依教法或依誨法發起思扱及修習故、能造斯行。応知如是思扱修習雖在善心。然不如

世尊がお答えになる。例えば、来世に取る次の生存について愚昧である者であれば、次の生存に対して願望を起すものである。この愚かさによって惹き起された次の生存に対する願望に基づいて、彼は次の生存中に何かとても好ましい事があると考え。しかし現在の目前の快不快の対象に囚われている以上、それは誤って分別している訳だから非福行を造ることになる。何故なら、彼は財物に対して貪著するからであるし、怨憎する者に対して瞋恚の心を起すからである。その上彼は、功德と過患をそれぞれ正しく認知することができず、怠け者で愚か者であるからその悪行をなす。つまり彼は、次の生存が包含する欠点や禍いについては、それを思い浮べることもできず、ましてその詳細を認識できはしないのである。このように、無明は以上の如き非福行の縁となっている。



理作意思惟。故是後有愚癡所引。謂於後有見勝功德癡覆藏故、及見出離癡覆藏故。

如是非福福不動行障礙対治与六識身俱生俱滅、能於現在已得生滅異熟識中安置諸行三種習氣。由此方便摂受後有新生種子。

摂受後有新生種子故、於当生中所起後有所撰名色六処触受次第而生。此名色等於現已得異熟識中但起因性、未有果性。是故但名所引縁起。

或は次の生存中に何か好ましい事があるだろうと考えた上で、出離を考へて福行や不動行を為すかも知れない。彼は教法や誨法に随つて思択し修習するから、確かにその行を為すことはできるだろう。しかしそのような思択や修習は善心に基づいたものではあつても、真如に適つて作意思惟したものである。つまりそれは次の生存に関する愚癡によって引き起されたものである。次の生存に何か好ましい事があると考へるのも癡に覆藏されているからであり、出離を考へるのも癡に覆藏されているからなのだ。

### (2) どのように引かれるのか。〔識〕

以上述べた如き非福行と福行と不動行の三種の対治されるべき障礙は、六識身と俱に生じ俱に滅して、現在得ている生滅する異熟識の中に、それ等諸々の行の三種の習氣を安置する。かう云う方法で、次の生存で新たに芽を出す種子を摂受するのである。

### (3) 何が引かれるのか。〔名色〕受〕

次の生存で新たに芽を出す種子を摂受しているから、来世に生起する次の生存に於て、そこに摂められる名色、六処、触、受は順序正しく生じるのである。この名色等は現在得ている異熟識の中では、ただ単に因としての性質のみを起し、まだ果としての性質は持っていない。それ故これを所引の縁起

とのみ言うのである。

(A)'' 「能引所引の縁起」の結語

如是名為第一無明与其能引所引縁起作等起縁。

以上の如くにして、第一に無明は能引所引の縁起にとって等起の縁となると言われる。

(B)' 「能生所生の縁起」(各論)

(4) 何によって生じるのか。「愛・取」

復言。世尊。云何名為第二無明与其能生所生縁起作等起縁。世尊告曰。

次いで(比丘が)尋ねる。世尊、どうして第二には無明が能生所生の縁起にとって等起の縁となるのですか。

謂有一類、愚於現在已得自体、於六触処為縁生受、便起味著。由味著故、希求当来如是類受。由希求故、於追求時便起於取。樂受所起愛為縁故、發生欲取。言欲取者、謂於諸欲妄分別貪。此為上首、此為前行、便有欲界一切煩惱。若復以其苦受為縁、生無有愛。厭離俱行、非理所引厭離相應依止此愛。不正方便求無有時即便

世尊がお答えになる。例えば、現在得ている生存について愚昧である者が六触処に縁生の受を起こせば、彼はそれに味著する。味著するから、来世にそれと同類の受を期待する。期待するから、その求めた時に至ったら取を起す。樂受によって起された愛を縁とするから欲取を生じる。この欲取と云うのは、つまり諸々の欲望の対象に対して妄りに分別する貪のことである。これを上首として、換言すればこれを先行するものとして、欲界の総ての煩惱が存在するのである。

或は樂受ではなく、苦受<sup>⑤</sup>を縁とした場合には無有愛を生じる。これは厭離

發起出離惡見定期惡見、及此二種所依惡見。由此義故名愛緣取。若即以此取為所依不離欲貪而命終者、由此諸見及乎欲界一切煩惱、名有欲界愛為緣取。若離欲貪、或離色貪、彼色界愛或無色愛便得生起。彼於色界或無色界煩惱轉時發起色界無色界取。由此諸色無色煩惱及彼諸見名有色界愛為緣取、及無色界愛為緣取。

彼由如是愛為緣取、先得種種行所熏習異熟果識、名為有取。彼由如是取所攝受、先所積集行等種子若彼彼處諸愛未斷、即彼彼處功能現前、能生後有。由彼行等能有當生、能令生有將入現在。故說名有。由彼取力行等

と俱行する。しかし確かに厭離と相応してはいるが非理によって引かれたものであるから、この愛に依止する。つまり正しい方便を通さずに無有を求めるときには、即ち出離惡見と定期惡見の二種を起し、それ等がそれぞれ依止する惡見を起すことになる。右の如き意味で愛を緣として取があると言っているのである。この取を所依として欲界の貪を離れない儘で死んだら、この四種の惡見と欲界の一切の煩惱とによって、欲界の愛を緣とする取が存在する。この場合、もしも欲界の貪を離れたとしても、彼の色界の愛が生じるし、或は色界の貪を離れたとしても、無色界の愛が生じて存在する。そこで彼が色界或は無色界で煩惱を起せば、その時、色界或は無色界の取を起すのである。つまりこの諸々の色界無色界の煩惱及び先程の諸々の惡見によって、色界の愛を緣とする取、無色界の愛を緣とする取が存在するのである。

(5) どのように生じるのか。〔有〕

彼は右の如き愛を緣とする取によって、既に種々様々な行に異熟果識を熏習されている。これが取が存在すると云うことである。彼はこのような取に攝受されているから、以前に積集した行等の種子や様々な場合に起した諸々の愛は未だ断滅しておらず、即ち様々な時と場合に應じて、その働きが現前して次の生存を生じるのである。この行等によって来世の生涯がある。つまり生有を將いて実際に存在させるから、「この行を」<sup>⑥</sup>有と言うのだ。何故な

成有。

ら、取の働きによって行等有を成立させるからである。

(6) その生じることとは何か。〔生〕

以是為緣、從此命終、先所引發漸次生起。由此義故名有緣生。

これ〔有〕を緣とし、これに基づいて命終すると、それ迄に引き摺められていた〔当に生ずべきもの〔名色〕受〕が漸次生起する。この意味で有を緣として生があると云われる。

(7) その時の苦悩は何か。〔老死〕

生既生已、先起時分變異名老、於最後辺命尽名死。由是故名生緣老死。

「生」が生じてから、先ず時の経過に随って変異するのが老であり、最後の瞬間に命が尽きるのが死である。このことから生を緣として老死があると云われる。

(B)'' 「能生所生の緣起」の結語

如是名為第二無明与其能生所生緣起為等起緣。

以上の如くにして、第二には無明は能生所生の緣起にとって等起の緣となるのである。

註① 「如是我聞一時薄伽梵……」とこの經を始め、「時薄伽梵説是經已……聞佛所説皆大歡喜信受奉行」と結ぶ以外、玄奘訳は主格呼格を問わず一貫して「世尊」を用いる。一方達磨笈多訳は「如是我聞一時婆伽婆……」の後、導入部で教ヶ所「世尊」を用い、「彼等比丘於世尊説……」とこの經を終える他は総て「比丘白佛大徳……佛言比丘……」の形を取る。資料篇〔2〕のチベットの語訳資料もこの形を支持するので、この形の方が原典に近いかと思われるが、比丘からの佛への尊称として「大徳 bhadanta」が使われているのはこの經典の所屬について一つの問題を提供する。

- ② 漢訳に於ける十二支縁起の定形的表現。これは勿論サンスクリットであれば *avidyāpratyayaṅ samskāraṇi*, *samskārapratyayaṅ vijñānaṃ*, *vijñānapratyayaṅ namarūpaṃ*……と言いつ *bahuvrīhi* の表現であり、ムーリでも事情は同じである。これ等に一致させて読み下すなら「無明の縁もて行あり、行の縁もて識あり、云々」とでもせざるを得まい。実際この經典中に、チベット訳から想定する限りサンスクリットが十二支縁起を述べるものと同形の *samskārapratyayaṅ vijñānaṃ* と言つ形であると考えられる箇所があるが(資料篇<sup>3</sup>参照)、それを玄奘は「行是識縁」と訳している。このことからすればこう読み下すのも一法かと思われるが、しかしこの読みはいかにも苦しい。同じ箇所を達磨笈多が「行縁於識」と訳しているように、「縁」を動詞に読む方が漢文としては自然なようであるが、ここでは、背後にあるサンスクリットを予想して訳しておく。
- ③ 達磨笈多訳の「無明縁中」は「無明縁受」に訂正。八三一頁 a 二三。
- ④ 宮本に従う。
- ⑤ 達磨笈多訳の「若復新受為縁」は「若復苦受為縁」に訂正。八三一頁 b 二三。
- ⑥ 同右八三一頁、b 二六「依亦有二合為四種」の割註あり。
- ⑦ 同右八三一頁 c 八「説彼行為有」によって補う。

## [2] AVVS チベット語訳の回収

本稿第二節で AVVS が PSTy に五箇所引用されることを述べたが、ここにその部分を抜き出し、両漢訳と対照させておきたい。これは漢訳にのみ現存する AVVS の原典形態を考察する上で重要な意味を持つものと思われる。これによって、資料篇<sup>3</sup>の YBhVy の引用例と併せて、AVVS 全体の約十分の一をチベット語訳として回収することになる。

なお若干注意すべき点を述べておく。引用例(1)はただ一文が引用されるのみであるが、一文置いた次の部分も AVVS に一致するので併せて取り上げる。引用例(2)は PSATVS の十八句よりなる「老」の説明を五項目に分類し直したものの。引用例(5)は PSTy へは(5)に連続するが、AVVS 両漢訳では間に別の文章が入るので分離して掲げる。

引用例 (1) (P. ed., 56a<sup>e</sup>-b<sup>z</sup>, D. ed., 49a<sup>1-4</sup>)

*Dan pohi bye brag nman par hbyed pahi mdo sde* (\**Āli-viśeṣa-vibhāga-sūtra*) las bcom ldan ḥdas kyis de ltar dge sloṅ dag nman pa bshihī mtshan ṅid kyi skye ba ni rim pa gaṅ gis skye ba dan | gaṅ skye ba dan | ji ltar skye ba de ni ḥdihī skye bahi mtshan ṅid yin par rig par byaho shes gsuṅs so | nman pa bshihī mtshan ṅid ni ji ltar ḥphans pahi min dan gzugs dan skye mched drug dan | reg pa dan tshor bahi mtshan ṅid do | rim pa gaṅ gis skye ba ni sa bon btab pahi skye ba dan | dehi hog tu dehi ḥphel bahi skye ba dan | dehi hog tu btsas pahi skye ba dan | dehi hog tu ḥphel bahi skye ba dan | ḥphel bar ḥgro bahi phyir ro | mi rtag pa dan srog gi dbaṅ pohi dbaṅ<sup>a)</sup> gis dan | dus dpag tu yod par gnas pahi chos ṅid yin pahi yan phyir | mi rtag pa skye ba ṅid skye ba yin no | a) P. dbaṅ gi.

[玄奘訳八三九c~八四〇a]

復言。世尊。如是四種生身之相由<sub>二</sub>生老死<sub>一</sub>有何差別。世尊告曰。即此四種生身之相若次第生若屬<sub>レ</sub>彼生若如<sub>レ</sub>是生。應<sub>レ</sub>知是名<sub>二</sub>生身生相<sub>一</sub>。

復言。世尊。云何次第生身生相。世尊告曰。於<sub>二</sub>其最初<sub>一</sub>有<sub>二</sub>下種生<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>此無間有<sub>二</sub>漸增生<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>此無間有<sub>二</sub>出胎生<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>此無間有<sub>二</sub>漸長生<sub>一</sub>。既成長已受<sub>二</sub>用言說<sub>一</sub>能得<sub>二</sub>等生<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>是品類名<sub>二</sub>次第生<sub>一</sub>。

復言。世尊。此屬<sub>レ</sub>誰生。世尊告曰。蘊界処生都無<sub>レ</sub>有我。所以者何。以<sub>二</sub>諸蘊等漸增長<sub>一</sub>故其性無常。即無常法有<sub>二</sub>此

生相。

復言。世尊。云何而生。世尊告曰。由命根力。有暫時住。分限法。故其性無常。即無常法如是而生。

〔達磨笈多訳八三二c〕

比丘白佛。大德。所有四種出生之相。与生老死。有何差別。佛言。比丘。彼四種出生之相。随次第。生若生。随相似。生彼出生中生相如是。是心知。

比丘白佛。大德。出生之相。次第而生。当何所似。佛言。比丘。彼初下種。即当有。生。彼次第增長生。彼次第出胎生。彼次第增長生。彼增長已。能得受用世俗生。此次第生復誰所生。衆界入生。而無有我。何以故。五衆等增長。遷流以無常故。及命根力限量時。住亦為無常所生故。

引用例 (2) (P. ed., 57a<sup>6</sup>-b<sup>3</sup>, D. ed., 49b<sup>5</sup>-50a<sup>2</sup>)

*Dan̄i poḥi bye brag nman par hbyed pa* (\**Ādi-viśeṣa-vibhāga*) las gsuns pa dge slon dag skye ba nman pa bshi po nid kyi tshе yons su hgyur bas byas paḥi phons pa nman pa lha ni rgas pa shes byaḥo | hoḥs pa nman pa lha la skras hphons pa ni byis pa dan̄ mdog gyur paḥi phyr ro | lus phons pa ni dbyibs dan̄ ṣa dan̄ stobs dan̄ mdog gyur paḥi phyr ro | las phons pa ni smra ba na lud ba lu ba dan̄ | dbugs rgod paḥi lus yin paḥi phyr ro | laḥs pa na gduḥ na gug pa bshin du gug por gyur paḥi phyr ro | hduḡ pa na lus mdun du gug paḥi phyr ro | hgro ba na hkar ba brten paḥi phyr ro | yid kyi na ṣes rab rmons pa dan̄ dran pa gshan paḥi yan phyr ro | lons spyod phons pa ni yo byad la lons spyod shan paḥi phyr dan̄ | rtsed mo dan̄ dgah baḥi yo byad la thams cad nas thams cad du lons mi spyod paḥi phyr dan̄ | dhan̄ po gzugs can nman

ran gi yul la mi gsal bar rgyu ba dan mi rgyu bahi phyir ro | srog gi dban po phons pa ni tshé zad pa dan ši ba dan ñe ba dan hchi bahi rkyen cun zad tsam yan mi bzod pahī phyir ro | rgas pahī mnam granis boo brgyad po de dag ni de ltar bsád do shes brjod do | a) D. lus. b) P. śas rab.

[女裝訳八四〇a]

即此四種生身之相時分變異心，知能作五種衰損，說名為老。

復言。世尊。云何名為五種衰損。世尊告曰。一者鬚髮衰損。以彼鬚髮色衰壞故。二者身相衰損。形色膚力皆衰損故。三者作業衰損。發言氣上喘息逾急身戰掉故。住便偻曲以其腰背皆無力故。坐即低屈身羸弱故。行必按杖身虛劣故。凡所思惟智識愚鈍念昏亂故。四者受用衰損。於現資具受用劣故。於戲樂具一切不能現受用故。於諸色根所行境界不能速疾明利而行或不行故。五者命根衰損。壽量將盡隣近死故。遇少死緣不堪忍故。

[達磨笈多訳八三二c~八三三a]

比丘。彼四種出生之相時分破壞即作五種衰惡，說名為老。

比丘白佛。大德。何者是五種衰惡。佛言。比丘。一者髮衰惡。髮壞離色故。二者依衰惡依謂身也。肉處色力衰惡故。三者業衰惡。語時上氣喘息故。住時曲如牛背曲故坐時向前重身故。行時按杖故。意智繫縛及念弱少故。四者受用衰惡。於現在眾具中受用下劣故。於諸遊戲所可喜中皆不受用故。於色根自境界中不疾行不及行故。五者命根衰惡。壽尽死近及少緣死不堪忍故。



引用例 (3) (P. ed., 58a<sup>3-6</sup>, D. ed., 50a<sup>7-12</sup>)

*Dan poñi bye brag nam par hbyed pa* (\**Āti-viśeṣa-vibhāga*) las dge sloñ dag skye bahi mtshan ñid nam pa bshi po de dag ñid la | hchi bahi rab tu dbye ba nam pa drug yod par rig par bya ste | rdsogs par śi ba dan | ma rdsogs par śi ba dan | śi bahi ran gi mtshan ñid dan | ma rdsogs par hchi bahi nam par dbye ba dan | rdsogs par śi bahi nam par dbye ba dan | dus ma yin pa dan dus su śi baño | dge sloñ dag de la śi bahi ran gi mtshan ñid ni lus las nam par śes pa bral shin hñg pa dan | dbañ po gzugs can rnam nu par gyur pa las rig par byaño shes gsunś te | de dag ni śi bahi nam grañś nam pa bcu po de dag gi don bstan pa yin no shes brjod do | a) P. śi ba.

〔玄奘訳八四〇a〕  
 即於此四生身相中一復有六種死差別相。一者究竟死。二者不究竟死。三者自相死。四者不究竟死分差別相。五者究竟死分差別相。六者時非時死。應知此中自相死者謂識離身色根滅沒差別之相。如是名為生身相中名色等相由生老死一而有差別。

〔達磨笈多訳八三三a〕

比丘。於彼四種出生相中一亦有六種死差別。應知。一者究竟死。二者不究竟死。三者自相死。四者不究竟死分。五者究竟死分。六者非時時死。比丘。於中自相死者識於身中移出別分及色根滅沒。如是應知。比丘。名色等出生之相与生老死一有此差別。

引用例 (4) (P. ed., 12b<sup>4</sup>-13a<sup>1</sup>, D. ed., 11b<sup>4</sup>-12a<sup>1</sup>)

*Dan pañi bye brag nram par hlyed pañi chos kyi nram grans* (\**Ādi-viśeṣa-vihāga-dharma-pariyāya*) las kyan  
 | sñon gyi mthah la sogs pa mi śes pa nas brtsams te gsunis pa | dge slon dag mdor na ma rig pañi las ni  
 nram pa gn̄is su rig par bya ste | nram pa thams cad du hñug pañi rten sbyin pañi las can gyi ma rig pa  
 dan | nram pa thams cad du ldog pañi bar du good pañi las can no | btsun pa nram pa thams cad du hñug  
 pa gañ she na | dge slon dag gañ la hñug pa dan | gañ hñug pa dan | ji ltar hñug pa ste | hdi ni nram pa  
 thams cad du hñug pa yin no | btsun pa gañ la hñug ce na | dge slon dag bdag tu nram par rtog pa dus la  
 hñug go | btsun pa gañ hñug ce na | dge slon dag bdag tu h̄dsin pas nan dan phyiñi skye mched do | btsun  
 pa ji ltar hñug ce na | dge slon dag bdag tu nram par rtog pa dan log par yoñs su rtog pa las dan nram  
 par smin pañi rgyun hñug paño | btsun pa nram pa thams cad du ldog pa gañ she na | dge slon dag mdor  
 na nram pa thams cad du ldog pa ni nram pa bshi ste | ldog pañi rten dan | ldog pañi dmigs pa dan | ldog  
 pañi yid la byed pa dan | ldog pañi hbras bu hgrub pas kyan yin no | a) P. h̄dsung pa. b) P. D. mched laho.

[玄奘訳八四二a~b]

復言。世尊。云何無明作業殊勝。世尊告曰。応知無明略有二種所作事業。一者無明普能造作一切流轉所依事業。二者無明普能造作一切寂止能障事業。復言。世尊。何等名為一切流轉。世尊告曰。若是處轉、若是事轉、若如是轉。我總說為一切流轉。

復言。世尊。是何處轉。世尊告曰。於三世處。由我分別。復言。世尊。是何事轉。世尊告曰。内外六處。由我取

執。復言。世尊。云何而轉。世尊告曰。諸業異熟相續流轉。由我分別。由邪分別。復言。世尊。云何名為一切寂止。世尊告曰。一切寂止略有四種。一者寂止所依。二者寂止所緣。三者寂止作意。四者寂止果成。是名無明作業殊勝。

〔達磨笈多訳八三五a〕

比丘白佛。大德。何者是無明作業殊勝。佛言。比丘。略說無明有二種業。一。應知。一者一切諸種發轉与作依止業。二者無明。二者一切諸種背轉与作障礙業。二者無明。比丘白佛。大德。何者是一切諸種發轉。佛言。比丘。若起轉生、若轉生、如轉生。是為一切諸種發轉。比丘白佛。大德。何起轉生。佛言。比丘。流轉道中。以自我分別一故。比丘白佛。大德。何法轉生。佛言。比丘。內外諸入。以自我撰取一故。比丘白佛。大德。云何轉生。佛言。比丘。業之与報相續一發轉。以自我分別及邪分別一故。比丘白佛。大德。何者是一切諸種背轉。佛言。比丘。略說四種背轉。所謂一者背轉依止。二者背轉拳緣。三者背轉思念。四者背轉果成。比丘。此是無明作業殊勝。

引用例 (5) (P. ed., 13a<sup>5</sup>-b<sup>2</sup>, D. ed., 12a<sup>5</sup>-b<sup>1</sup>)

de ñid las kyañ mi śes pa la sogs pañi tshig gi don bstan par brtsams te gsuñs pa | btsun pa mi mthun  
pañi phyogs ma rig pañi bye brag gan she na | dge slon dag ma rig pa ni mchog gi chos kyi mi mthun  
pañi phyogs yin pa dan | rgya chen pohi chos kyi mi mthun pañi phyogs yin par yan btea bar byaho |  
btsun pa ma rig pa ni mchog gi chos kyi mi mthun pañi phyogs ji ltar lags | dge slon dag dbañ po lha

rnamas kyi nan nas hdi ni bslan bar bya ba hdi ni brtan par bya ba ste | hdi Ita ste śes rab kyi dpan poḥo | dehi mi mthun paḥi phyogs ni ma rig pa yin te | des na mchog gi chos kyi mi mthun paḥi phyogs shes byaḥo | btsum pa ji Itar rgya chen poḥi chos kyi mi mthun paḥi phyogs ma rig pa lags | dge slon dag thos pa las byun ba dan | bsams pa las byun ba dan | bsgom pa las byun baḥi śes paḥi mi mthun paḥi phyogs ma rig pa yin te | des na rgya chen poḥi chos kyi mi mthun paḥi phyogs shes byaḥo |

[玄奘訳八四二b]

復言。世尊。云何無明障礙殊勝。世尊告曰。応、知。無明障礙勝法。障礙広法。

復言。世尊。如何無明障礙勝法。世尊告白。言勝法者能撰五根一命其和合。所謂慧根。障礙此者即是無明。是故說名障礙広法。

復言。世尊。如何無明障礙広法。世尊告曰。言広法者聞所成智、思所成智、修所成智。障礙此者即是無明。是故說名障礙広法。

[達磨笈多訳八三五a]

比丘白。佛。大德。何者是無明惡對殊勝。佛言。比丘。勝法惡對無明及広法惡對無明。此二応見。

比丘白。佛。大德。云何勝法惡對無明。佛言。比丘。其五根中以此撰取以此和合。所謂慧根。彼之惡對則是無明。是故說名勝法惡對。

比丘白。佛。大德。云何広法惡對無明。佛言。比丘。所有聞體智、思體智、修體智。彼之惡對則是無明。是故說名広法惡對。

引用例 (5) (P. ed., 13b<sup>2-4</sup>, D. ed., 12b<sup>1-3</sup>)

btsum pa ma rig pa dan rjes su hbrel pahi bye brag gan lags | dge sloñ dag srid pahi rtse ma man chad  
kyi khamis gsum pahi sems can rnamis la hdi lta ste | sems can rnamis la mi šes pa yod pa de ni dum bur  
ma byas pa | gsod ldon du ma byas pa | bag la ñal ba dan rjes su hbrel pa yin no | des na sems can de  
dag ni mthañ dag gis bcñis pa yin no | gan yañ bde hgro dan ñan hgrohi rgyu dan hbras bu rnam par dbye  
ba mi šes pa yañ yin te | de yañ šin tu chuñ ba ni gzugs med pa na spyod pahi sems can rnamis kyihö |  
bar ma ni gzugs na spyod pa rnamis kyihö | chen po ni hdod pa na spyod pa rnamis kyihö |

〔玄奘譯八四二c〕

復言。世尊。云何無明隨縛殊勝。世尊告曰。乃至有頂三界有情於諸諦中所<sub>レ</sub>有無智隨眠隨縛未<sub>レ</sub>缺未<sub>レ</sub>減。由<sub>レ</sub>彼有情說名<sub>レ</sub>具<sub>レ</sub>縛。又此無智善趣惡趣因果差別。無色有情有<sub>レ</sub>其下品。色界有情有<sub>レ</sub>其中品。欲界有情有<sub>レ</sub>其上品。

〔達磨笈多訳八三五b〕

比丘白<sub>レ</sub>佛。大德。何者是無明順縛殊勝。佛言。比丘。乃至有頂趣等三界衆生於<sub>レ</sub>此諦中若未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>智彼無<sub>レ</sub>空缺順  
眠恒縛。亦以<sub>レ</sub>彼故謂<sub>レ</sub>彼衆生<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>具<sub>レ</sub>足縛。若復善趣惡趣因果分中亦未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>智彼微細者無色界衆生、次中者色界、增  
上者欲界。

〔3〕 YBhVy における AVVS の引用例

YBhVy<sup>①</sup>は『瑜伽師地論』に対する一注釈であり、不完全な形のチェット語訳としてのみ現存する。漢訳の『瑜伽師地論釈』(大正卷三〇、八八三—八)とは、帰敬偈および序論の部分が一致するなど、深い関係にあることが知られている。<sup>②</sup>このYBhVyに於ては『意地 (mano-bhinna)』の冒頭の句に対する注釈の形をとって、アーラヤ識と染汚意に対する存在論証が、教証 (agama) と理証 (yukti) との両面から詳論されている。その中、教証の部分については別稿にてその概略を紹介しておいたが、<sup>③</sup>ここにAVVSがアーラヤ識の教証として引用されている。YBhVyはこれ以外にも数多くの經典を引用しているが、それら諸經典はYBhVy自身によって大乘と声聞乘とに分類されており、AVVSは声聞乘としての分類に入れられている。別稿では引用部分の和訳を紹介するにとどめたので、<sup>④</sup>このチェット語訳および両漢訳の対応箇所を以下に掲げる。

*Dan' pohi bhavad' par gyi cha dan' mthun pa shes bya bahi mdo las kyan | btsun pa hdi Itar hdu byed nams ni nram par ses pahi tshogs drug' po dag dan' lhan cig' hbyun' ba nram par ses pa dan' mtshun's par ldan pa nrams dan' hbyun' lags na de cini slad du hdu byed kyi rkyen gyis nram par ses pa shes bgyi lags | dge sloi hdi Itar nram par ses pahi tshogs drug' po bsod nams dan' | bsod nams ma yin pa dan' | mi gyo bahi hdu byed nrams dan' lhan cig' tu hbyun' shin' mtshun's par ldan pa (ma) hgags pa nrams ni tshe rabs gshan gyi nram par ses pa gsar skyed pahi tshul gyis nram par smin pahi nram par ses pa la hdu byed kyi bag chags h'jog par byed do | shes gsun's so |*

〔支婁訶〕復言。世尊。諸所有行与六識身相応俱有同生同滅。何縁故説行是識縁。世尊告曰。以六識身与福非福及不動行相応俱有同生同滅。異熟識中安置諸行熏習種子引发余生新異熟識。由此道理。是故宣説行是識縁。

〔達磨笈多訳〕比丘白、佛。大徳。若行於<sub>レ</sub>六識身中、和合共生者何故説言<sub>レ</sub>行縁<sub>ニ</sub>於識。佛言。比丘。此六識身中福非

福不動等行和合共生共滅。即於<sub>ニ</sub>果報識中<sub>ニ</sub>安<sub>ニ</sub>置諸行熏習<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>後新異出<sub>ニ</sub>生報識<sub>ニ</sub>作引<sub>ニ</sub>方便。是故説言<sub>ニ</sub>行縁<sub>ニ</sub>於識。

この引用部分についての注意すべき点を述べておく。まず、この場合 AVVS は *Dan' poli khvad' par gyi' cha dan' mthun pa shes bya bali mdo* なる経名で引用されているが、これをそのまま梵文に還元するとすれば \**Ādi-viśesa-bhagya-nāma-sūtra* としても想定しうるが、本稿で述べてきたように、この *cha dan' mthun pa* とあるその原語は、*bhagya* ではなく *vihāga* であらねばならない。それが YBhVy の引用中に *cha dan' mthun pa* とやれているのは、このテキストをチベット語訳する際用いられた原本の中に誤字があったか、あるいは訳出の仕方が不適切であったかによると思われる。従ってこの場合の経典名もまた KST, PSTy の場合と同様、\**Ādi-viśesa-vihāga-nāma-sūtra* と還元するのが最も適切であるように思われるのである。

また、ここに提示した部分は、資料篇[1]に和訳した AVVS 独自の十二支縁起解釈に対する比丘と世尊との間の質疑応答の中、第二「行支」および第三「識支」にかんする箇所であるが、この縁起の第三「識支」が異熟識であると、AVVS の説が、YBhVy においてアーラヤ識存在の教証の一つとして取り上げられているのである。

註① P. ed., No. 554, Yi 82a<sup>e</sup> 以下。

② 向井亮「アサンガにおける大乘思想の形成と空観」(『宗教研究』二二七号)三三〜四頁。同「顕揚聖教論と瑜伽師地論」(『佛教学』八号)四二頁参照。

③ 本稿註⑨に示す拙稿参照。

④ YBhVy, op. cit., 100a<sup>e</sup>-b<sup>i</sup>, 玄奘訳八三九a〜b、笈多訳八三二a。

⑤ 両漢訳によっている“ma”は削除すべきである。